

(前号からの続き)

(28) 明治廿四年七月廿四日午後一時 昨日の御差図二もとづき口議の事情御願」(52才)

さあへまあ一寸の處 どふゆふことはじめかけ よき処のり又々のり とんとならんり 三ツのりをさとす たれにどふと八ゆわん これまで道をとふし どんな中もつれてとふりたこれからさきどんな事もわかる わかるからきゝわけ わからん間ハきゝわけできよふまい ざわへしているといふよふなもの なれとだ」(52ウ)

んへ道をとふりたら あらへわかりてある 又一ツの道もわけにやなるまい だんへむこふさき年限かさなる事情せまる せまる事情あれバどんな日もあるともわにやならん さきのたのしミ 今の一時にとりてハならん 今のたのしミハさきのたのしみにならんどんなさしづしてなりととふさにやならん どんないつき」(53才)

とふぜん わかきといへど わかきがわかきにたゝん としよりがとりよりにたゝん 是迄の処にて ふるき道をたづねてみよ つまる はじめより尋ねてみよ あらへわかる はじめ尋ねバいつへまでも十分といふ とふもならん どんな山坂あるやらわからん なにほどどふしてやるとをもへど 神一条の道をわすれてハ山坂ころつと をち」(53ウ)

にやならん 此屋敷 たすけやしきといへど めんへの心のさいにかさなれば どんなさいがあるやらわからん とふく処ハとふく処のりがある 一時きいてわれへとりをこしらへるならかやしてやろ つんでやろ たてゝやろ 心をさだめてみよ しゆんへ道八日々しらす 日々しらすりに はかりかたなひから よふきゝとつてくれ」(54才)

さあへ身のじゆよふならば ぜんへ席事情しばらくやすむとゆふてある 身上にふそくあれバ日々とふる事できよふまひ一ツにハ事情とまりたであるかともふ 日々たすけ一条の道日々たのもしい一ツの道 一日一席の事情ハゆるしをこ 十分にだんじる事情のり 中ほとにうかゝう 又尋る一時事情にもとづく事できん もふその事情き」(54ウ)

ゝにくい どんなはなしも なるほどこれハ 地場からりをつたへてきくはなし さかんな事なら一ツの道のはなしかと こくびかたむけて なるほどゝきく しらずへの道 わからづへの道 みづへの道ある これ三ツでかけたらどふもならん さかんほどめんへの心をしづめてかゝるから さかんといふ 心に」(55才)

りかあれバ かつての道とゆふ かつての道ハさかんとハゆへよふまひ くらがりの道がミへてあるからさとさにやならん しつかりミなへつたへてをさめてくれ 又席へとゆふてはこんで りをもつてたちよる めんへ心にとつていかなるりもきゝわけて なるほどゝゆふ どんなさんげもせにやならん なにかの事」(55ウ)

もきいて いかなる事情とゆふ

(注) 割書の口は判読不明。八巻本及び改修版はともに「さんげ」と記される。

(29) 明治廿四年七月廿六日 大阪芦津分教会所本部員招体の

願 仮開講式執行二付テ

さあへ尋ねでるよふ 一寸まなび ほんのしるし 一寸の事情あとへ心ある 一時の所 そのまゝうちへまなびそれでよい

(30) 明治廿四年七月廿一日」(56才)

にたき場普請の願

さあへ尋る事情へ尋る処 さあへふしん ぶしん一条今一時どちもこちらもかりや 十分の処といふハ さきになるによつて ミなかりや あちらもとりはらい なんどきもよふかへるやらわからん 今にして今にとらんならんやらわからんできりなしへとゆふてある いつまでのなかい間を」(56ウ)

ミてハどふゆふものともて きりなしふしん 一寸年限しらしてある 十分たちきり 一寸かゝりかけ みなかけたしふしん あちらもふそく こちらもふそく ふそくやなけりやいかん 十分わかりてあるによつて 一寸かりやふしんにして あす日にたてかへせんならんやらわからん 日々処きりなしふしんといふ心もつてどんな」(57才)

たてかたでも どんな事もゆるしをくによつて なんどきなりと 心をきのをかゝるがよい

石垣の願

きまり 一寸かりのきまりもなけらいかん 一寸かりにあちらの石こちらの石よせ できたかとゆふハ 又くずさんならんやら 何時なりとかゝるがよい 心をきのふゆるす」(57ウ)

取拂ヒの事情

さあへもふかりなら 何時なりとすつきり十分ゆるしをく 御神楽十二下り十前再板ノ事情御願

さあへまあ今の処 べつにこふとゆふ しよじいさいにもたづ そのまゝじいとしてをくがよひで

押ての願 (58才)

さあへまあへ今の処そのまゝじいともちいりてをくがよひ

(注) これは明治24年7月31日 炊事場普請御許しの願である。日付が異なる。なお中に出てくる割書は、八巻本には、「同時、巽の角伊兵衛さん地所に三方へ石垣の御許願」「同時、中山会長様御居間古家取払ひ御許の願」「同時、御神楽十二下り版木前の分損じたるに付更に版木制作の願」「おして暫く見合せ置方がよろしう御座います哉」となる。

(31) 明治廿四年八月四日 大和新聞社申来りし事二付伺フ

さあへ事情のりを尋るへ りを尋るからハ一ツ一寸さしづしておこふ どふゆふ事もこふゆふ事も 事のなる中 むつかしい中からどふゆふりであるふ この道といふハ」(58ウ)

すうきりもんかたもなき処から をいへの道 つくすはこぶ中から だんへの道 どんな事ゆいたてる どんな事ゆいたてゝも をめもをそれもするやなひ もんかたなき処からだんへの道 是迄いかなる事もいふてあるふ でゝくる ミる二つのり 一寸わかりかねる 人間一ツのりがある こふゆふ事すうきりとめて」(59才)

(次号へ続く)